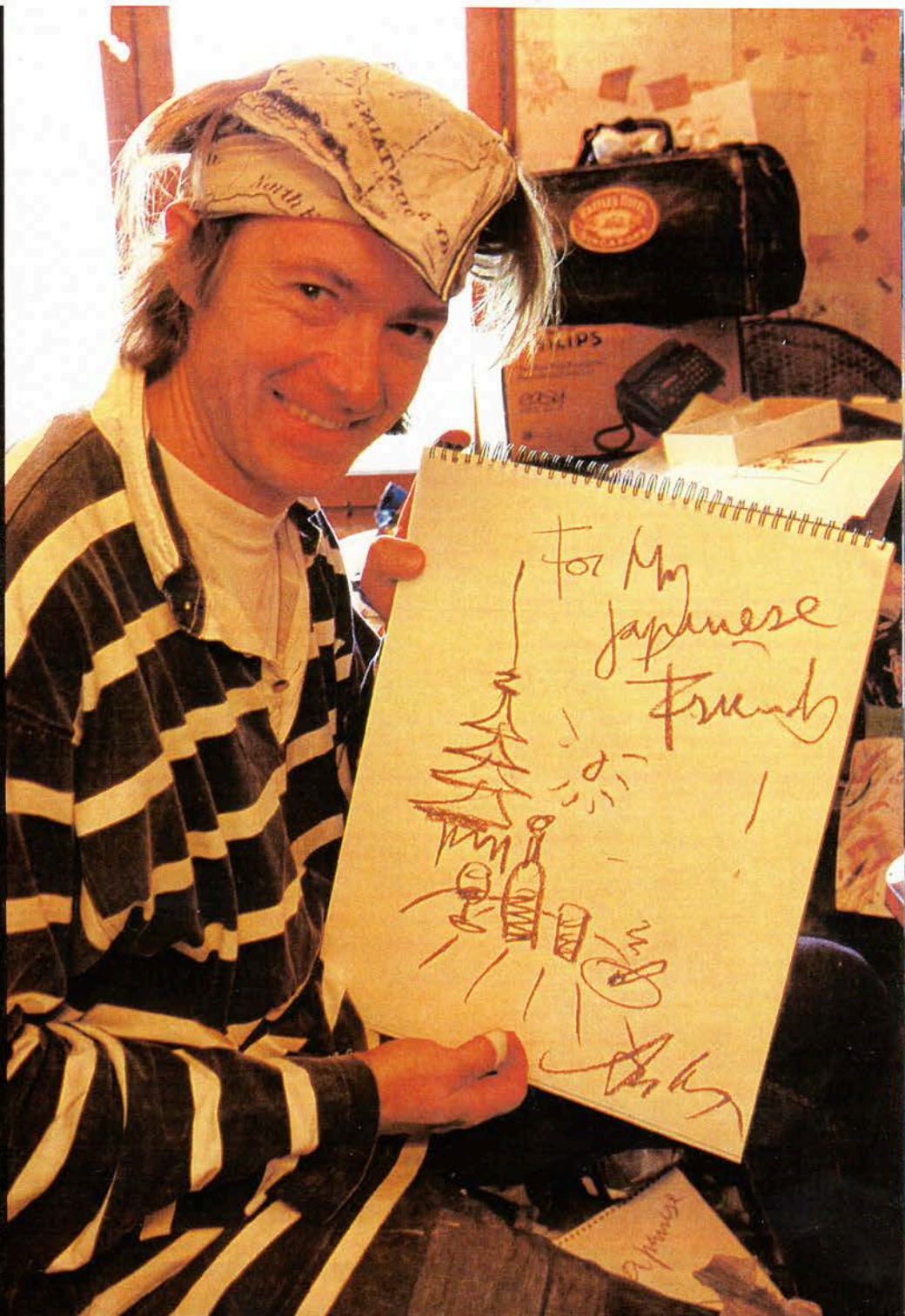


妻のクリスティーナがわれわれのために作ってくれた、ハンガリー料理「グラッシュ」。パプリカの色が鮮やか。



彼の愛する妻とふたりの娘たち。ハンガリーを出るときまだ赤ちゃんだった下の娘も今年で12歳になる。



日本で初めての個展を間近にひかえている彼に、セブンシーズ読者へのメッセージを描いてもらった。日本展では、パリ、コートダジュール、イタリヤ・コモ湖などの旅の思い出を結晶にした作品が並ぶという。

その中で最も印象的なのは、やはり彼のアトリエだった。油絵具の臭いの充満したこの部屋には、描きかけの絵、画材、絵画のモチーフ、さまざまなおブジエが入り乱れ、彼自身もまだまだ整理してない横溢するアイデアと絵画への情熱が、その混沌とした中に、生き物のよううにして息づいているのが感じられる。

社交的で家族思いの彼だが、とつぜん絵画へのインスピレーションを受け取ると、彼はその部屋にこもって、食事もとらず、時間も忘れて創作に没頭するのだという。そんなアントンを気遣い、支えるクリスティーナの気苦労も大抵ではない。「うちには三人子供がいて、アントンがいちばん手がかかるの」。そう言って屈託なく笑ったクリスティーナの笑顔が心に残った。

編集部

日本でのデビューが待っている。ときにはスーパリアリズムを思わせる鋭い観察眼と描写力を見せながら、単に人や物体をあるがままに描くというレベルとはかけ離れた精神性を感じさせる彼の絵には、感情に流されない緻密な計算と、しかもそれを超えた直感の難きが同時にある。「絵は完璧なパズルのようにして生まれる」そんな彼のメッセージに、その絵の本質が垣間見えた。

ところで、彼らがデижョンを選んだのは、川を抱いた古びた美しい街並みが、彼らの郷里であるブダペストへの郷愁をかきたてたからだった。彼らの家は、その街を見下ろす丘の上に建つ、小さな庭のある一軒家だ。その庭にはクリスティーナが苗を手植えたチェリー、リンゴ、バラが鮮やかな緑をたたえている。一階に居間とキッチン、二階に、ほんの六畳ほどのアトリエと夫婦の寝室、娘たちのための部屋がある。

*日本での個展、オープニング・レセプションについては、147頁をご参照ください。